

日本語の不変化詞「の」による叙述的名詞句連結構文の派生について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 岸, 浩介 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24933

日本語の不変化詞「の」による叙述的名詞句 連結構文の派生について*

岸 浩 介

要旨

本論の目的は、岸（2018）で展開した日本語の同格構文への分析を改良し、日本語の不変化詞「の」によって名詞句が連結され、叙述関係を表す構文（例：「外科医の山田」）に応用することである。より具体的に言えば、同構文が小節構造を基底構造に持つという仮説に基づき、Chomsky（2013, 2019）や Chomsky et al.（2019）などによる近年のミニマリスト統語論で仮定されているワークスペースや一般化併合（MERGE）、ラベル決定アルゴリズム、外的集合併合による叙述関係の概念、Sheehan et al.（2017）による「主要部配置条件」(FOFC)などを用いた分析を提示する。さらに、この分析が、小松原（2016）による「反転修飾」構文や菊地（2008）による「評価的同格構文」などに関わる経験的帰結だけでなく、いくつかの概念的帰結をもたらすと論じる。

目次

- I. はじめに
- II. 基本的事実
 - 2.1. 西山（2003）
 - 2.2. 本論で扱う構文
- III. 先行研究
 - 3.1. NP_1 を N_2 の補部とする分析
 - 3.2. NP_1 を N_2' の付加部とする分析
 - 3.3. NP_1 を NP_2 の付加部とする分析
 - 3.4. RP で叙述関係を表す分析
- IV. 分析
 - 4.1. 理論的枠組みと道具立て
 - 4.1.1. ワークスペース（WS）と一般化併合（MERGE）
 - 4.1.2. ラベル決定アルゴリズム（LA）
 - 4.1.3. 主要部配置条件（FOFC）
 - 4.1.4. 一般化叙述構造
 - 4.2. 提案と派生の過程
 - 4.3. 説明
- V. 帰結
 - 5.1. 反転修飾構文
 - 5.2. 評価的同格構文
 - 5.3. 概念的帰結

* 本論の準備過程において、金澤俊吾先生、坂内昌徳先生には貴重なコメントをいただいた。また、金澤先生からは大変参考になる文献をご紹介いただいた。厚くお礼申し上げます。なお、言うまでもなく、本論のいかなる不備や誤りも、全て筆者一人によるものである。

VI. おわりに
参考文献

I. はじめに

本論では、(1) のような、日本語における不変化詞の「の」で名詞句が連結された構文のうち、1 番目の名詞句と 2 番目の名詞句の間で、叙述関係（あるいは同格関係）が成り立つものを取り扱う¹。

- (1) a. 外科医の山田
b. 弁護士の田中

岸 (2018) の結語において、筆者は、日英語の同格表現への分析を、(1) のような事例に応用する可能性を示唆した。本論は、その可能性を追求することを目的としたものである。

本論では、奥津 (1978) や小川 (2016) に従い、(1) の構文における不変化詞「の」が連結辞のような性質を持つと仮定したうえで、岸 (2015, 2018) で扱った日英語の他の同格構文（例：the ripper Jack / Jack the ripper (岸 2015: 36) ; 「山田外科医 / 外科医山田」(岸 2018: 106) ; 「山田という外科医 / *外科医という山田」(岸 2018: 107)）と同様、小節構造から派生されると提案する。具体的には、岸 (2018) で用いた、Chomsky (2013, 2015) などによる「ラベル決定アルゴリズム」(Labeling Algorithm=LA)、ならびに岸 (2021) における英語の前位・後位形容詞の分析で採用した、Sheehan et al. (2017) による「主要部配置条件」(Final-Over-Final Condition=FOFC) に加え、Chomsky (2019) などによる、ミニマリスト統語論で展開されているワークスペース (Workspace = WS) と一般化併合 (MERGE) の概念を用いたうえで、Chomsky et al. (2019) の基本的発想に従い叙述関係の具現を最大投射同士の外的集合併合 (External Set-Merge=ESM) と捉え、これらの相互作用により、(1) のような表現の派生が進行すると提案する。また、ここでの説明が、「反転修飾」(小松原 2016: 184) による構文や「評価的同格構文」(菊地 2008: 280) の派生にも容易に適用可能であるとともに、いくつかの概念的帰結をもたらすと論じる。

本論の構成は以下のとおりである。第 II 節では、不変化詞「の」で名詞句が連結された構文の基本的事実として先行研究で示されている分類を紹介し、ここで扱う叙述的な構文が

¹ 「の」は一般的に「助詞」と呼ばれているが、ここでは生成文法研究の慣例に従い、「不変化詞」(particle) という用語を用いることにする。

持つ特徴を確認する。第 III 節では不変化詞「の」による叙述的名詞句連結構文を扱った先行研究を概観し、その問題点について確認する。第 IV 節では、その問題点を解決するために、上で述べたような、ミニマリスト統語論を主たる枠組とし、小節構造を基底構造とした派生を提案する。第 V 節では、その派生がもたらす経験的・概念的帰結をあげる。第 VI 節は本論の結論である。

II. 基本的事実

本節では、不変化詞「の」によって名詞句同士が連結された構文を、理論言語学の観点から比較的詳しく分類した文献として西山（2003）を紹介する²。

2.1. 西山（2003）

西山（2003）は、「NP₁のNP₂」の形式を持つ論文を、(2a-e)の5つに分類している³。

- (2) a. タイプ [A]: NP₁ と関係 R を有する NP₂
- b. タイプ [B]: NP₁ デアル NP₂
- c. タイプ [C]: 時間領域 NP₁ における、NP₂ の指示対象の断片の固定
- d. タイプ [D]: 非飽和名詞（句）NP₂ とパラメータの値 NP₁
- e. タイプ [E]: 行為名詞（句）NP₂ と項 NP₁ (西山 2003: 16)

西山（2003: 6-50）は、(2a-e)のそれぞれについて詳述しているが、本節では、そこでの説明を以下のように要約する。まず、タイプ [A] に含まれている関係 R とは、語用論で決定される抽象的な種々の関係を指し、あらゆるものがその関係に該当しうる（西山 2003: 16）。たとえば、「洋子の首飾り」（西山 2003: 16）は、「洋子の所有している首飾り」「洋子が手にしている首飾り」「洋子の製作した首飾り」「洋子が買ったがっている首飾り」（西山 2003: 17 下線は筆者）というように、様々な解釈を持ちうる。

タイプ [B] は、「コレラ患者の大学生」（西山 2003: 19）のように、NP₁ が NP₂ の述部になっており、「コレラ患者であり、同時に大学生であるひと」（西山 2003: 19）のように連

² 西山（2003）以外の分類としては、益岡・田窪（1992: 157-160）や、日本語記述文法学会（2009: 107-112）などがある。また、于（2014）は、名詞句を連結するもの以外も含めた「の」全般の、辞書における記述をまとめている。より詳細な分類としては、島津ほか（1986）がある。

³ 本論では名詞句を表すために、NP だけでなく DP (= Determiner Phrase) (Abney 1987) という表記も用いる。

結辞「である」で言い換えられるものを含む⁴。

タイプ [C] は、NP₂ の指示対象が NP₁ の時間領域における指定によって定まる事例である。たとえば、「大正末期の東京」(西山 2003: 31) では、「様々な時代における東京」のうち、「東京」の指示対象が NP₁ によって「大正末期」のものとして指定されている。西山 (2003: 31-32) は、このタイプの NP₂ には固有名詞などの定表現が生じるが、NP₁ はむしろ制限的修飾要素としての役割を果たしていることを指摘している。

タイプ [D] は、西山 (2003: 33) が「非飽和名詞」と呼ぶ要素を含むタイプであり、「この芝居の主演」(西山 2003: 33) のようなものが該当する。この「非飽和名詞」とは概ね指定文 (specificational sentence) における変項を含む名詞句に対応し⁵、西山 (1990) にもとづき西山 (2003: 33) は、「[X の] というパラメータを要求」する名詞句のことを指すと論じている。より具体的に言えば、上述の「この芝居の主演」の場合、名詞句「主演」の指示対象は、単独で用いる場合は定まらないが、名詞句「この芝居」によって確定されるので、その意味で、「主演」は値が未指定のパラメータを含んでいるということである (西山 2003: 33)。

最後のタイプ [E] は、NP₁ が NP₂ の項になっているものである。たとえば、「物理学の研究」(西山 2003: 40) の場合、「物理学」が「研究 (する)」の「対象」を表す項として、「洋子の到着」(西山 2003: 41) では「洋子」が「到着 (する)」の「主題」を表す項として、それぞれ機能している。

以上が、西山 (2003: 6-50) で述べられている、不変化詞「の」で名詞句を連結した構文の分類である。

2.2. 本論で扱う構文

前節でみたように、この不変化詞「の」による名詞句連結構文は多様な意味を持ちうるが、本論で焦点を当てるのは、名詞句同士が連結辞構文の主部・述部の叙述関係を確立しているように見えるタイプ [B] である。西山 (2003: 21-24) はこのタイプ [B] の特徴をいくつかあげているが、それは次のようにまとめることができる。まず、前節でも触れたように、このタイプに属する名詞表現は、「である」による言い換えが可能である。たとえば、(3a) は (3b) のように言い換えられる。

⁴ 西山 (2003: 20) は、「コレラ患者の大学生」を、関係節を含む構造から派生させることを提案している。この点については 3.2, 3.3 節でも取り上げる。また、同種の分析については、奥津 (1978: 133-134)、柴谷 (1978: 164) などを参照。ただし、奥津 (1978) の分析は、西山 (2003) によるタイプ [B] 以外の名詞句構造の派生にも連結辞「だ」が関わるというものである。

⁵ 指定文の詳細については Higgins (1973) や Declerck (1983) などを参照。

- (3) a. ピアニストの政治家
b. ピアニストである政治家 (西山 2003: 19)

さらに、タイプ [B] では、(4) が示すように、定表現を NP₁ に付加させることができない。

- (4) a. ?この患者の大学生
b. ?あいつの政治家 (西山 2003: 21)

これは、NP₂ とは異なり、NP₁ が、西山 (2003: 21) も指摘するように叙述名詞句であり、定表現と共起しないことによると考えられる。

さらに、タイプ [B] では、NP₁ への量化表現の修飾が許されない。

- (5) a. ?女性全員の運転手
b. ?何人かの女性の運転手 (西山 2003: 24)

これも、(4) と同様、NP₁ が叙述名詞句であることに起因すると考えられる。

加えて、このタイプ [B] にある NP₁ を等位接続表現にするときには、「と」ではなく「だ」の連用形である「で」が用いられる。

- (6) a. [フランス文学者とピアニスト] の政治家
b. [フランス文学者でピアニスト] の政治家 (西山 2003: 24)

西山 (2003) は (6a) にアステリスクなどはつけていないが、「<フランス文学者であり、しかもピアニストでもある政治家>の意味にとることは無理であろう」(西山 2003: 24) と判断している。

さらに、西山 (2003) が触れていない、タイプ [B] の特徴として、(7) のような事例が考えられる。

- (7) 外科医₁の山田₂は自分自身_{*1,2}を批判した。

上述の通り、タイプ [B] の NP₁ は叙述名詞句なので、再帰代名詞などの先行詞にはなれな

いと予測され、事実、(7) では再帰代名詞「自分自身」の先行詞として「外科医」をとることはできない。

ここまで見てきた西山 (2003: 6-50) における分類のうち、タイプ [B] に該当する構文が本論の考察対象である。説明の都合上、この「不変化詞『の』による叙述的名詞句連結構文」(Predicative Nominal Constructions with the Particle *No*) のことを、これ以降、英訳の頭文字をとり、PNCN と略記する。次節では、このタイプの構文の統語構造に関する先行研究を紹介する。

III. 先行研究

前節でみた、本論の考察対象となるタイプ [B] の名詞句の構造としてどのような構造分析が考えられてきたか (あるいは、考えられうるか)、以下で紹介する。ここで紹介するのは、(i) NP_1 が N_2 (つまり NP_2 の主要部) の補部となる分析、(ii) NP_1 が N_2' の付加部となる分析、(iii) NP_1 が NP_2 の付加部となる分析、(iv) Den Dikken (2006) による Relator Phrase (= RP) を用いて叙述関係を保証する分析、の 4 つである。

3.1. NP_1 を N_2 の補部とする分析

まず、一般的な英語の名詞句に対して与えられている統語構造を、本論で扱う PNCN に応用できるかどうか検討しよう。たとえば、西山 (2003) は「物理学の学生」(西山 2003: 44) という名詞句に対し、Radford (1981) などによる、(8) の英語の名詞句構造を応用することを試みている。

- (8) a. a student of physics
 b. [_{NP} a [_{N'} student [_{PP} of physics]]] (Radford 1981: 97 一部改変)

(8a) の統語構造となる (8b) では、前置詞句 of physics が主要部 student の補部として生起している。「物理学の学生」がこれと同じ構造を持つとすると、その構造は、(8b) を主要部後置型にした (9) のようになる。

- (9) [_{NP} [_{PP} 物理学の] 学生 (= N)] (西山 2003: 44 一部改変)

しかし、この構造はそもそも西山 (2003) によってタイプ [E] の構造に対して仮定された

ものであり⁶、また、(10) が示すように、タイプ [B] の 2 番目の名詞句には主要部レベルのものだけでなく、句レベルのものが生起する。

- (10) a. 外科医の、優秀な教員
 b. 内野手の、敏捷な選手⁷

(10a-b) では、「外科医の」と「内野手の」が、それぞれ、句である「優秀な教員」と「敏捷な選手」に先行している。これらが容認可能である以上、1 番目の名詞句「外科医の／内野手の」が N の補部に生起する構造を仮定するのは、少なくとも二項枝分かれ構造を仮定する現在のミニマリスト統語論では困難である。

3.2. NP₁ を N₂' の付加部とする分析

次に紹介するのは、NP₁ が主要部 N₂' にとって付加部となっている分析である。西山 (2003: 20) は、タイプ [B] の名詞句に対して、前節の (9) の構造とやや異なる、(11b) を基底構造に持つ (11a) の構造を与える可能性を示唆している。

- (11) a. [NP [PP コレラ患者の] [N' 大学生]] (西山 2003: 20 一部改変)
 b. [NP [S [PP pro は] [PRED [NP コレラ患者] デアル (=V)]] [N' 大学生]]
 (西山 2003: 20 一部改変)

(11a) では、N' 節点に PP の「コレラ患者の」が付加されている。しかし、この構造では、前節の (9) で仮定した PP が補部として生起する構造と区別するため、必然的に中間投射である N' 節点に PP を付加させざるをえないが、結果的に N' 節点から枝分かれすることなく N 節点が生じることになり、併合 (Merge) 操作によって統語構造が作られるために枝分かれしない構造は生じえないミニマリスト統語論の基本方針からは逸脱した構造となってしまう。また、(11b) では、関係節の話題句として PP の「pro は」が生起しており⁸、NP₂ の「大学生」と同一指示関係にある。V のデアルはその補部として名詞句「コレラ患者」を取り、共に PRED 節点を形成している。関係節全体は S として N' 節点に付加されている。しかし、(11b) から (11a) を派生させるには、デアルを「の」に置き換えるという、近年のミニマ

⁶ ただし、西山 (2003) は最終的に (9) のような事例をタイプ [A] に分類している。

⁷ (10) のとおり、1 番目の句と 2 番目の句の間には休止が必要であると思われるが、前者は後者にとっての述部として機能する要素ではあると思われる。

⁸ 西山 (2003: 51 注 7) は、格助詞なども P で表記している。

リスト統語論の精神に反した、構文固有の統語操作が必要になってしまう。

3.3. NP₁ を NP₂ の付加部とする分析

3 番目に取り上げるのは、前節と同様、関係節を基底構造に持つ一方で、NP₁ が最大投射である NP₂ に付加されるという分析である。たとえば、西山 (2003: 23) は、NP₂ が固有名詞であるため、NP₁ を含む PP が最大投射の NP 節点に付加されている (12a) が、前節と同様、(12b) のような関係節を基底構造に持つとする分析を示唆している。

- (12) a. [NP [PP 運転手の] [NP 田中君]] (西山 2003: 23 一部改変)
 b. [NP [S [PP pro_i ガ] [PRED [NP 運転手] デアル (=V)]] [NP 田中君_i]]
 (西山 2003: 23 一部改変)

しかしながら、ここでも基底構造となる関係節を名詞句の構造に置き換えており、前節で指摘した、構文固有の書き換え規則の仮定が必要になるという問題が生じる。

3.4. RP で叙述関係を表す分析

最後に紹介するのが、小節などの叙述関係の機能を持つ投射の存在を名詞句の統語構造内に仮定する分析である。たとえば、菊地 (2008) は、Den Dikken (2006) によって提案された、叙述関係を含むあらゆる機能範疇が主要部 R として機能しうる RP を用いて、PNCN の一例である、(13) の「評価的同格構文」(菊地 2008: 280) の構造を提案している。

- (13) a. X のバカ (がまたしでかした) (菊地 2008: 280 一部改変)
 b. [DP [NP₁ X]_i-no [NP [RP t_i [R' [NP₂ t_j] t_j]] baka_j] D] (菊地 2008: 286 一部改変)

菊地 (2008) が取り上げる評価的同格構文とは、(13a) のように、1 番目の名詞句の述部として、「バカ」のような名詞句が後続する、「外科医の山田」とは逆のパターンを持つ構文のことであり、菊地 (2008: 280 注 1) が指摘するように、典型的には、罵倒や侮辱を表す表現が 2 番目の名詞句として生起する。この (13a) の構造として、菊地 (2008: 286) は両者の叙述関係を保証する機能範疇 R による投射を仮定しており、1 番目の名詞句と 2 番目の名詞句はその指定部と補部に生起している。RP の上には *n(ominalizer)P* (菊地 2008: 286 注 3) があり、これは叙述関係を名詞表現に変換する機能を果たすと考えられる。また、叙述名詞

句「バカ」は主要部移動により R を経由して n まで連続循環的に移動している⁹。名詞句「X」は属格の照合の理由で DP の指定部に移動している。

一方、小川（2016）は、上の評価的同格構文と同様、叙述関係が見られるものの評価的同格構文とは異なり述部名詞句として罵倒・侮辱とは言えないような名詞句が生じる、「等位同格構文」（小川 2016：285）を取り上げ、Den Dikken（2006：Chapter 5）の Qualitative Binominal Noun Phrase 構文との類似性について論じている。「等位同格構文」の具体例は、「子どもの犬／犬の子ども」（小川 2016：285）などである。小川（2016）は、DP と RP、「たち」などが主要部となる Num(ber)P、「ども」が主要部となる SimilarP、述部倒置を担う機能範疇 F による FP などの各種機能範疇を用いてこの等位同格構文を分析し、この構文が示す交替をとらえようとしているが、本論で取り上げる構文と同等の構文である（14a）は（14b-d）の構造を持つと論じている。

- (14) a. 犬の子ども（たち）／子どもの犬（たち）（小川 2016：296）
 b. $[_{DP} NP_i (\text{犬}) [_{D'} D (\text{の}) [_{NumP} [_{RP} t_i [_{R'} [_{SimilarP} NP (\text{子}) \text{Similar} (\text{ども})] R (\phi)]] \text{Num} (\phi / \text{たち})]]]]]$
 c. $[_{DP} D (\phi) [_{NumP} [_{FP} [_{F'} F [_{RP} NP (\text{犬}) [_{R'} [_{SimilarP} NP (\text{子}) \text{Similar} (\phi)] R (\text{ども})] \text{Num} (\phi / \text{たち})]]]]]]]$
 d. $[_{DP} D (\phi) [_{NumP} [_{FP} [_{SimilarP} NP (\text{子}) \text{Similar} (\phi)] [_{F'} R (\text{ども}) + F (\text{の}) [_{RP} NP (\text{犬}) [_{R'} t_{SimilarP} t_R]]] \text{Num} (\phi / \text{たち})]]]]]$ （小川 2016：296）

(14b) は、「犬の子ども（たち）」の構造である。ここでは、叙述関係を担い、音形を持たない機能範疇が R として生じ、その指定部と補部に「犬」と「子ども」（SimilarP）がそれぞれ基底生成されている。RP の上には NumP が生じ、その主要部 Num は、単数に対応する ϕ もしくは複数に対応する「たち」として具現する。NumP の上位には DP が生起しており、D が不変化詞「の」に対応している。RP の指定部にあった「犬」は DP の指定部に移動している。また、R と Num は補部の右側に生起しているが、D の「の」は補部の左側に生起している。小川（2016：295）は、このような主要部の位置に関する相違を説明するために、非フェイズ主要部と異なり、フェイズ主要部による構造が Kayne（1994）の「線形配列公理」（Linear Correspondence Axiom）に従って線形化されると主張する Kitada（2012）の提案を採用し、フェイズ主要部が普遍的に主要部前置型構造を持つと仮定している。

⁹ よって、(13b) の baka_3 は、厳密には $\text{baka}_3 + R + n$ を意味する。

一方, (14c) は, 「子どもの犬 (たち)」の基底構造である。小川 (2016) にとっては, この「子どもの犬」が「犬の子ども」の述部倒置を経たものであり, (14c) では, 「ども」が複数機能形を表す標識としての機能を失った結果, Similar から R への「文法化」を起しており (小川 2016 : 295), Similar には「ども」の代わりに ϕ が生起している。小川 (2016 : 296) によれば, この音形を持たない Similar は機能範疇の指定部で認可される必要があり, 結果として, (14d) のように, SimilarP が FP の指定部に移動し, 述部倒置の標識として F が「の」として具現すると分析している。

以上, RP のような, 叙述関係を仮定した構造による分析を見てきたが, これらはいずれも RP の主要部 R が音形を持たない要素でありえ ((13b) と (14b) を参照), その場合にその主要部がなぜ音形を持たないまま具現するのかという問に答えなければならなくなる。特に, 岸 (2021 : 245 注 15) でも別の文脈で指摘したように, Bošković (1997 : 25) などによる「最小構造の原理」(Minimal Structure Principle) やミニマリスト統語論の基本的発想に基づけば, そのような要素の存在を仮定せずに済むのであればそれが望ましい。加えて, これは本質的な問題点とは言えないものの, 小川 (2016) の分析においては, FP が持つ, 「述部倒置を担う」という機能は明確であるものの, その種類は明示されていないように思われる。また, 小川 (2016 : 295) は, 「の」が連結辞「だ」に相当するという奥津 (1978) の提案を取り入れているが, (14) においては, その「の」が D の主要部として生じる場合と, 述部倒置の標識として F に生じる場合の 2 通りがある。この場合, そもそもなぜ同じ「の」が 2 通りの具現方法を持つのかという点については説明の余地が残っているように思われる。

IV. 分析

前節では, PNCN に対して考えられる構造をいくつか紹介し, そのいずれを仮定しても問題が生じることを確認した。本節ではこれらに対する代案を提示する。まず本論で仮定する, 理論的枠組み上の一連の道具立てを紹介する。

4.1. 理論的枠組みと道具立て

本論で採用する理論的枠組みは Chomsky (1995, 2000, 2001, 2008, 2013, 2015, 2019), Chomsky et al. (2019) などによる, ミニマリスト統語論の枠組みである。この理論では人間の言語表現を派生させる仕組みを言語計算モデルと捉えており, そのモデルは生物に備わる一器官として最適に設計され, そこでの計算は最適な形で進行すると考えられている。そこ

でのいくつかの道具立てに加え、本論では、Sheehan et al. (2017) などによる、可能な句構造の形式を規制する条件の FOFC を採用するとともに、叙述関係がどのような統語構造に反映されるかに関する仮説を採用する。本論で仮定する中心的な道具立ては、(15) の4つに集約される。

- (15) a. ワークスペース (WS) と一般化併合 (MERGE) (Chomsky 2019, Chomsky et al. 2019)
 b. ラベル決定アルゴリズム (LA) (Chomsky 2013, 2015)
 c. FOFC (Sheehan et al. 2017)
 d. 一般化叙述構造 (Chomsky et al. 2019)

以下で順を追って説明する。

4.1.1. ワークスペース (WS) と一般化併合 (MERGE)

まず、(15a) の WS と一般化併合 (MERGE) について紹介したい。WS は、Chomsky (2000: 106) では、「活動状態にある記憶領域」(active memory) と呼ばれており、Collins and Stabler (2016: 46) では、「派生のある段階で語彙配列 (lexical array) に基づき構築される統語的構築物 (syntactic object) の集合」と定義されている¹⁰。より単純化して述べれば、WS は、文字通り、言語計算を実行するための、ある段階での作業領域およびそこに含まれる統語的構築物 (syntactic object=SO) を指すと考えられる。この WS 内での計算は言語計算の基本となるものなので、以下では多少紙幅を割いてその概要を説明したい。

言語計算は、この WS 内で併合操作が統語構造を構築することによって進行するが¹¹、この併合操作について、Chomsky (2019: 280) は、MERGE という、従来の併合をより一般化させた操作として提案している。(ここでは、MERGE を「一般化併合」と呼んでおく。) 一般化併合は、Chomsky (2019: 280) では、WS に対して適用されるものであり、WS をほかの WS に写像 (map) する機能を果たす。この一般化併合は (16) のように定義される。

¹⁰ Collins and Stabler (2016: 46) による原文の定義は以下のとおりである。

(i) A *stage* is a pair $S = \langle LA, W \rangle$, where LA is a lexical array and W is a set of syntactic objects. We call W the *workspace* of S.

なお、ここでの「語彙配列」(lexical array) は、Chomsky (2000) などのミニマリスト統語論の枠組みで仮定されている、統語構造を構築する材料を列挙したものを指す。

¹¹ もちろん、実際には Chomsky (2000, 2001, 2008) などの一致操作や素性継承、フェイズ理論が関わり派生が進行するが、これらは脇に置いておく。

$$(16) \text{ MERGE}(\Sigma) = \{|X_1, X_2\}, X_3, \dots, X_n\} \text{ (Chomsky 2019: 280 一部改変)}$$

ここでの X は SO であり, Σ は構造に導入されて行く SO の和である。このことは (17) で定義される。(17) の 1 行目の Σ は, Chomsky (2019: 280) によれば, 「(17i-ii) を満たす最小の連鎖 (sequence)」を指す。

$$(17) \Sigma = (X_1, X_2, X_3, \dots, X_n)$$

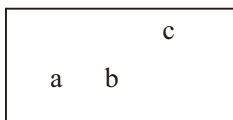
(i) Each X_i is *accessible* (that is the definition of *recursion*)

(ii) Σ exhausts the workspace (Chomsky 2019: 280 一部改変)

(17i) にあるように, WS に含まれるすべての X に対して統語操作の適用が可能である (よって, 統語操作の「再帰的適用」(recursion) が保証される)。また, (17ii) により, Σ は WS 内に含まれる全要素を指すことになると考えられる。先の (16) では, $X_1 \sim X_n$ からなる WS において一般化併合の適用により X_1 と X_2 を併合させ, その 2 つを X_1 と X_2 からなる集合 $\{X_1, X_2\}$ で置き換えたことを意味している。なお, この定義により, 一般化併合により構築される統語構造は必ず二項枝分かれ構造になる。

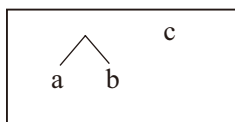
次に, Chomsky (2019: 280) の記述ならびにここでの説明に基づき, 一般化併合がどのように適用されるか, 図を用いて見てみよう。たとえば, (18) のように, 派生のある段階で, 語彙配列から選ばれた a, b, c の 3 つの SO を含む WS_1 があったとしよう。

$$(18) \text{ WS}_1$$



この WS_1 に対し, 外的併合 (External Merge = EM) のため一般化併合が適用され, a と b が併合される (つまり, 両者からなる集合が構築される, 厳密に言えば, a と b の両者を a と b からなる集合で置き換える) と, (19) の WS_2 に写像される。

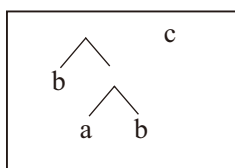
(19) WS₂



なお、(19)の段階では、aとbからなる集合のラベルは未決定の状態である。また、Chomsky (2019: 280)で述べられる通り、EMにおいては、SOの数は、(18)の3(つまり、a, b, c)から(19)の2(つまり、{a, b}とc)に減少する。

内的併合 (Internal Merge=IM) の場合は、Chomsky (1995)以降で仮定されているコピー理論に従い、コピーが形成され、併合が起こる。たとえば、(19)で、(17i)によって接近可能なbに対し(16)が適用され、{a, b}とbが併合された場合は、(20)のWS₃が写像される。

(20) WS₃



この場合は、(19)のSOの数が2(先述のとおり {a, b}とc)だったが、(20)のWS₃でも {b, {a, b}}とcの2つであり、その数は変わらない¹²。よって、この理論でのEMとIMはともに、あらゆる統語操作が満たすべき、効率性に関わる「計算資源を限定せよ」(restrict computational resources=RCR) (Chomsky 2019: 275)という原理に従った操作となり、WS内のSOの総数が増加することはない。なお、ここまで見てきた(18)から(20)の図は、(21)のようにあらわすこともできるだろう。

- (21) a. WS₁ = {a, b, c} (= (18))
 b. WS₂ = {{a, b}, c} (= (19))
 c. WS₃ = {{b, {a, b}}, c} (= (20))

¹² (19)の {a, b} は、(20)では {b, {a, b}} に置き換わっている。

また、たとえば関係節が付加された名詞句などの場合は、名詞句と関係節は別々の WS で派生され、WS 同士の併合も一般化併合の対象になるものと考えられる。さらに、ここであげたのは Chomsky (2013) などによる、語順に言及しない集合併合 (Set-Merge) だが、要素間の関係に言及する「対併合」(Pair-Merge) も Chomsky (2013: 45) では仮定されている。

4.1.2. ラベル決定アルゴリズム (LA)

次に、(15b) の LA について手短かに説明する。Chomsky (2013, 2015) では、LA として、(i) 主要部が最大投射と併合した結果、主要部が投射し、それがラベルになるパターン、(ii) 最大投射同士が併合し、一方が移動後に他方がラベルになるパターン、(iii) 同様に最大投射同士が併合し、両者が共有する素性がラベルになるパターン、の 3 つが提案されている。LA は投射という操作から範疇決定のためのメカニズムを切り離した結果生じたものであり、この採用は、生成文法研究で仮定されている「言語のモジュール」(modules of language) (Chomsky 1995: 27) の考え方の推進という点では理論上の前進と言える。なお、以下では、WS のラベルの表記として、(22) のような表記を用いる。

$$(22) \text{ WS} = \{_a \{a, b\}\}$$

ここでは、 a と b からなる集合のラベルが a であるということを意図している。これを従来の樹形図で表せば、(23) のようになる。

$$(23) \begin{array}{c} a \\ \swarrow \quad \searrow \\ a \quad b \end{array}$$

以下では、適宜、(22) の集合による表記、(23) による樹形図表記、従来の標識付き括弧表示を用いて行く。

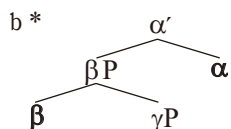
4.1.3. 主要部配置条件 (FOFC)

次に、(15c) の FOFC を取り上げる。FOFC は Sheehan et al. (2017) によって提案されている、可能な句構造の形式を制限する機能を果たす普遍的原理である。(24a) で定義される FOFC によれば、ある範疇を主要部とする構造が同種の範疇を主要部とする構造を直接支配する場合、主要部前置型構造は主要部前置型構造と主要部後置型構造のいずれも直接支配しうるが、主要部後置型構造が直接支配する位置には主要部後置型の構造のみが生じ、そこ

には主要部前置型構造が生起しない。つまり、これにより(24b)の構造が禁じられる。(24b)の α と β は同種の範疇とする。)

(24) a *The Final-over-Final Condition (FOFC)*

A head-final phrase α P cannot immediately dominate a head-initial phrase β P, if α and β are members of the same extended projection. (Holmberg 2017: 1 一部改変)



Final-over-Initial

(disharmonic)

(Biberauer et al. 2017: 12 一部改変)

なお、(24)の α と β がTとDなどの、全く異なる範疇の場合は、FOFCは機能しない(Biberauer et al. 2017: 12)。また、Sheehan (2017: 126)によれば、 α に β Pが付加された構造の時もFOFCが働き、そのような構造は排除される。また、(24a)の定義により、 β Pが指定部の場合も同様に排除されると考えられる。なお、本論では、このFOFCが統語構造を音素配列に変換する音韻部門(または「感覚-運動体系」(sensory-motor system)(Chomsky 2019: 265など)で適用される原理であると仮定する。

4.1.4. 一般化叙述構造

最後に(15d)の一般化叙述構造について述べる。Den Dikken (2006)は、Bowers (1993)による叙述要素Pr (= Predication)が投射したPrPの考え方を発展させ、3.4節で紹介した先行研究でも採用されていたとおり、(25)のようなRPを提案している。

(25) [_{RP} XP [_R R YP]] (Den Dikken 2006: 11 標識付き括弧表示に変更)

Den Dikkenによれば、上述の通りRPのRはあらゆる機能範疇が該当し、いわゆる小節もこのRPの一形式として具現する。一方で、Chomsky (2013: 43-44)などでは、小節を、Moro (2000)のように、(26)の最大投射XPとYPからなる対称的な構造と捉えている(α は未決定のラベルを表す)。

(26) [_{α} (= SC (= small clause)) [XP] [YP]]

この構造でたとえば XP が DP だった場合、派生の後の段階でその DP は TP の指定部に移動するため、 α のラベルは YP となる。このような小節構造は、Chomsky et al. (2019: 245) が示唆するように、叙述関係一般にも当てはまると考えることができる¹³。たとえば、そのような叙述関係は以下のように定義できるだろう。

(27) 一般化叙述構造：

小節を含む叙述関係は、最大投射同士が外的集合併合 (ESM) によって結合する場合に確立される。(Chomsky et al. 2019: 245 に基づいた定義)

(27) によれば、NP と AP, PP, VP などが ESM によって結合する場合、そこには叙述関係が成立する。よって、従来の RP や PrP はすべてこの構造の一例であったということになる。これは、Heim and Kratzer (1998) の形式意味論の考え方に基づけば、その結果生じる構造が $t(\text{ruth-value})$ の意味タイプ (すなわち 1 か 0 の真偽値) を持つものになるということの意味すると考えられる。Den Dikken (2006) では R が空の場合もその R の存在を仮定する必要があったが、Chomsky (2013) の考え方を一歩推し進めたこの仮定より¹⁴、そのような余分な仮定は不要となり、理論上の負荷を小さくできる。なお、最大投射である XP が移動 (コピー) し、YP と内的併合する場合 (いわゆる指定部位置に XP が移動する場合) は、IM による併合となるため、この (27) には該当しない¹⁵。

以下では、本節で仮定した 4 つの道具立てを利用し、PNCN の派生の過程を提示する。

4.2. 提案と派生の過程

前節での理論的枠組みを採用し、本節では PNCN への分析を提示する。まず、出発点として、本論では、(28a) のような PNCN が、(28b) のような連結辞構文に対応すると仮定する。

(28) a. 外科医の山田

¹³ この解釈は、(i) の文 (これは WS の説明をする文脈での一文である) の、{XP,YP} structures 以下の句に基づく。

(i) WS can contain multiple objects at a given stage, so as to permit formation of {XP,YP} structures (subject-predicate constructions) by EM. (Chomsky et al. 2019: 245)

¹⁴ Chomsky (2013: 44) では、最大投射同士が併合し、その結果生じる構造のラベルを決定する場合の問題として、小節以外に外項が v^*P と併合する事例を紹介している。このことから、おそらく、小節と v^*P を同列に扱うことを念頭に置いていたものと思われる。

¹⁵ なお、後述の無陳述仮説 (36) は、この道具立てを用いて具体化されることになる。

b. 山田が外科医だ。

この仮定は、奥津（1978）などによる分析でも見られるものであるだけでなく、岸（2015）で扱った英語の同格である *the ripper Jack / Jack the ripper* や、岸（2018）で扱った、それらに対応する日本語の同格である「山田外科医／外科医山田」ならびに「山田という外科医」といった同格でも仮定されているものであり、決して目新しいものではないが、そこでは、筆者は特に経験的根拠をあげたわけではなかった。以下では、両者に共通性があることを示す、奥津（1978）に基づく経験的事実を紹介する。

まず、この PNCN と連結辞構文との間の共通性として、以下のいわゆる「ウナギ文」（奥津 1978）の性質があげられる。

(29) a. 僕はビールだ。

b. 幹事：じゃ、そろそろ始めますか。注文しましょう。ビールの人。

一同：（挙手）

「ウナギ文」とは、「僕はビールを注文した」といった意味内容を、(29a) のような連結辞構文の形式を用いて表す構文を指し、奥津（1978）は、ウナギ文とそれに対応する名詞構文に対し、「だ」と「の」がともに代用表現として機能すると考える分析を提示している。ここではウナギ文の分析の詳細には立ち入らないが、名詞句連結構文が連結辞構文としての性質を共有していることは確かであると言えるだろう。

PNCN と連結辞構文の共通性として 2 番目にあげるのは、(30) のような対比である^{16,17}。

(30) a. 別 *な／の 問題

b. 本当 *な／の こと（奥津 1978：117）

(30) では、名詞句「別」「本当」などが「の」とは共起するが、「な」とは共起しない¹⁸。し

¹⁶ 奥津（1978）では、基本的にカタカナ表記で例文が記載されているが、本論ではそれをひらがな表記に改める。

¹⁷ (30) のような対比について、奥津（1978：118）は、「な／の」の判断には揺れがあることを指摘しているが、筆者は奥津（1978）と同様の判断を共有している。ここでは、奥津（1978：117）の判断に従い議論を進める。

なお、金澤俊吾先生（個人談話）の指摘によれば、話者によっては (30a) の「な」による事例を「これとは全く別な問題」とすることで容認度が改善するようである。そのような話者が (30a) の「な」による事例との差をどの程度認識しているかが問題になるが、この点に関しては今後追及したい。

¹⁸ 奥津（1978：117）は、「いろいろ な／の 催し」「格別 な／の ご配慮」「肝心 な／の こと」「特

かし、これらの名詞句はすべて、(31) のように、連結辞構文に生起する。

- (31) a. その問題は別だ
b. それは本当だ

(30) と (31) から、これらの名詞句が通常の形容動詞（「な」形容詞）形はとらず、したがって名詞句の環境には生起しない表現であるのに対し、連結辞構文には生起する。このことは、PNCN が連結辞構文と対応していることを意味する。

PNCN と連結辞構文の共通性として 3 つ目にあげられるのが、連結辞構文に生じるものが PNCN にも生じるという点である。(32) を考察しよう。

- (32) a. [雪舟が子供] の時の話です
b. [家が本郷] の人は近くていい (奥津 1978: 125 [] 表示は筆者)

奥津 (1978: 125) は、もともと (32a) が三尾 (1942 [1995]), (32b) が杉山 (1964) による指摘であることを述べつつ¹⁹、格助詞「が」の生起が、連結辞構文が基底構造にあったことによると論じている。

4 つ目の共通性として、PNCN の 1 番目の名詞句に、副詞句が生起しうる点があげられる。(33) を見てみよう。

- (33) [なにがなんでもユニバーシアード] の醜態 (奥津 1978: 131 [] 表記は筆者)

(33) は、奥津 (1978: 131) によれば、スポーツの国際競技会であるユニバーシアードにどのような手段を用いてでも参加したいと願う団体に関する記事の表現とのことだが、連結辞構文に生起する副詞句「なにがなんでも」が（「なにがなんでもユニバーシアードだ」(奥津 1978: 131)）、名詞句内の環境であるにもかかわらず生起している。また、(34) が示すように、副詞句そのものが「の」に先行する形で生起しうる。

別 な／の 待遇のように、「な／の」のどちらとも共起する例をあげている。本論では、この問題についてはこれ以上追求しない。ちなみに、奥津 (1978) は「だ」と「の」だけでなく、「な」も等しく取り扱おうとしている。

¹⁹ 三尾 (1942 [1995]: 173-174 (ページは 1995 版)) は (32a) のような事例を、杉山 (1964: 278) は、(32b) のような例を、それぞれ複数あげ、ともに、この「の」を「だ」の連体形とみなす見解を提示している。

- (34) a. 早々の御返事
b. 西に向かつての大追跡 (奥津 1978 : 135-136)

副詞は本来、名詞句を修飾するものではないので、これらもまた、不変化詞「の」による名詞句連結構文の根底に連結辞構文の性質があることを意味している。

PNCN と連結辞構文の共通性として最後にあげたいのが、(35) のような事例である。これは、2.2 節でみた、タイプ [B] の名詞句連結構文が持つ特性を指す。

- (35) a. [オーストラリア人で] [都立大学生の] クラーク君 (奥津 1978 : 142 []) 表記は筆者)
b. [医師で] [作家の] 山田さん

(35) には、等位接続構造が含まれている²⁰。Radford (1981 : 59-60) なども指摘するように、等位接続構造では一般的に同一範疇のものが接続されるので、この表現が容認可能だということは、単に不変化詞「の」による名詞句連結構文と連結辞構文が類似しているだけでなく、不変化詞「の」が、「だ」の連用形である「で」と同種のものであることを意味している。

以上、ここまで、本節では、PNCN と連結辞構文の共通性を見てきた。では、その連結辞構文はどのような統語派生を経て構築されるだろうか。連結辞構文は、一般的に小節構造から派生される (Stowell 1978 や Moro 2000, Chomsky 2013 など)。PNCN と連結辞構文が上記のような共通性を持つ以上、(36) のような仮説を立てることが可能になる。

- (36) 提案 (無陳述仮説) :

日本語の不変化詞「の」による名詞句連結構文 ([NP₁ の NP₂]) のうち、叙述関係を担うものは、小節構造から派生される。

この仮説は、叙述関係という意味関係が、小節構造という統語構造を反映したものであるということを述べているが、小節構造は、本来、連結辞構文 (Stowell 1978 や Moro 2000, Chomsky 2013 など) や知覚動詞構文 (Basilico 2003 など) はもちろんのこと、一部の名詞句構造 (Nakajima 1991 や上述の菊地 2008, 小川 2016, 岸 2015, 2018, 2021) を派生させ

²⁰ たとえば (35b) を「[医師で作家] の山田さん」という等位接続構造と取ることができるのではないかと考える読者の方もいるかもしれないが、「* [医師で作家] が店に入ってきた」という文は非文なので、ここでは (35b) のように、「医師で」と「作家の」による等位接続構造と考える。

るのに利用できるものである。したがって、小節構造の仮定自体は構文固有のものではなく、統語理論全般にとってなんら負担を強いるものではない。ゆえに、これは無陳述仮説としての資格を十分持つと考えられる²¹。

さて、それでは、その小節構造とはどのようなものであるべきだろうか。同格表現の派生を説明するため、岸 (2015) では、小節構造として RP を用いたが、岸 (2018) では、その問題を指摘したうえで、小節構造として Chomsky (2013) による最大投射同士の対称的併合構造を採用した。本論では、前節の (27) で見たように、ここでの小節構造を、Chomsky et al. (2019: 19) の示唆に基づいた、最大投射同士の ESM により構築された構造という、より一般性の高い構造と捉えている。なお、最大投射同士（たとえば XP と YP）が併合するということは、両者が上位要素にとって等距離であるため、ともに上位に移動しうることが予測される。事実、後述の、小松原 (2016: 184) による「反転修飾」構文（例：「新品のペットボトル／ペットボトルの新品」（小松原 2016: 185））のように逆転する事例や、菊地 (2008: 280) による「評価的同格構文」（例：「X のヤブ医者」「Y の悪徳弁護士」（cf. 「ヤブ医者 of X」「悪徳弁護士 of Y」））のように、述部として機能する名詞句が後続する事例が存在し、この提案によりそれらの事実が容易に捉えられる。よって、小節構造を、最大投射が ESM によって構築された構造として捉える考え方には一定の経験的根拠があると言えるだろう。

以上を踏まえ、本論では、岸 (2018) による分析の基本的骨格を継承しつつも、(37a) の構文の基底構造が、(37b) にある小節構造の WS であると分析する。

- (37) a. 外科医の山田
b. $WS_1 = \{\text{山田, 外科医}\}$

(37b) は、名詞句「外科医」と名詞句「山田」が併合された後の段階の WS であり、最大投射同士の併合なのでラベルは未決定の状態である。この未決定のラベルを決定するために、「山田」か「外科医」のいずれかが移動すれば、あとに残された方のラベルが小節全体のラベルとなり、「外科医山田」もしくは「山田外科医」といった、不変化詞「の」を欠き、職業名を伴う同格表現が派生される（岸 2018: 2.2 節）。しかし、語彙配列の中に不変化詞「の」

²¹ ここでの「無陳述仮説」(null hypothesis) は、原口ほか (2016: 640-641) に従い、生成文法研究で用いられる「独立した根拠によって動機づけられた操作などのみからなる仮説」といった意味での概念であり、統計学などで、対立仮説の正しさを論じるために棄却される「帰無仮説」とは異なる意味で用いていることに留意されたい。詳細については、原口ほか (2016: 640-641) を参照。

なお、この無陳述仮説からもわかるように、名詞句の派生に小節を利用しているという点で、本論の提案は、菊地 (2008) と小川 (2016) の基本的精神を受け継いでいる。

がある場合, (37b) に対して不変化詞「の」が併合される。この不変化詞「の」は, 奥津 (1978) などでも仮定されているように, 「だ」の連体形である考えられる。小川 (2016: 285) の用語に従えば, 「名詞的繫辞」(nominal copula) とも言える²²。この不変化詞「の」の小節への EM の結果, (38a) の WS_2 が構築される。

- (38) a. $WS_2 = \{ \{ \text{山田, 外科医} \} \text{の} \}$
 b. $\{ \text{の} \} \{ \{ \text{山田, 外科医} \} \text{の} \}$
 c. $[_{VP} [_{SC} [_{NP} \text{山田}] [_{NP} \text{外科医}]] \text{だ} (= V)]$

この構文における不変化詞「の」は句レベルの要素による修飾を受けない (例: 「*外科医まさにの山田」) ため主要部であると考えられる。主要部と併合した構造の場合は主要部が投射するので, LA により (38b) のように「の」が全体のラベルとなる。(ただし, {山田, 外科医} のラベルはまだ未決定である。なお, この時点での構造は, (38c) の通常の連結辞構文の動詞句と類似した構造になっていることに注目されたい。)

派生が (38b) の段階に到達すると, 小節構造 {山田, 外科医} のラベルを決定する必要が生じるが, 本論では, 岸 (2018) の基本的発想に従い, そのラベル決定のために移動 (コピー) が生じると分析する。さらに, 本論では, その時の移動が, 4.1.1 節で紹介した RCR に従い WS の拡大を防ぐような形で, 名詞句「山田」または名詞句「外科医」のいずれかが移動 (コピー) を起こすと分析する。ただし, このときの移動は, 岸 (2018) で提案した複合辞「という」の場合とは異なり, 上述の反転修飾構文の事例が示すように, 一致との関連で起こるものではない。なぜなら, 複合辞「という」の場合は固有名詞を選択していたが (例: 「山田という外科医 / *外科医という山田」(岸 2018: 107)), 上述の「新品のペットボトル / ペットボトルの新品」(小松原 2016: 185) でも見たように, 不変化詞「の」の場合は固有名詞以外のものも選択できるからである。名詞句との一致関係が確立されることもないとすると, 小節全体のラベルを決定する段階で, 2つの名詞句のどちらも移動の候補になりうる。結果として, (39a) のように小節構造から名詞句「山田」が移動した場合, Chomsky (2013: 44) の仮定のもとでは元位置のコピーはラベルになれないので, 小節構造のラベルが「外科医」となる。また, (39b) のように「外科医」が移動すれば「山田」が小節構造のラベルとなる。(取り消し線は発音されないコピーを表す。ただし, 以下では, 適宜, 伝統的な痕跡の記号 t も使用する。)

²² 英語の場合, of が名詞的繫辞に相当すると考えられる (Den Dikken 2006: Chapter 5)。なお, 小川 (2016) による「繫辞」という用語を, 本論では「連結辞」と呼んでいる。

- (39) a. $\{\}_{\text{外科医}} \{\text{山田, 外科医}\} \{\text{山田}\}$
 b. $\{\}_{\text{山田}} \{\text{山田, 外科医}\} \{\text{外科医}\}$

ここで、名詞句が左方移動ではなく、右方移動を起こしている（厳密に言えば、右方移動を起こしているものとして集合内の要素が解析される）のは、前述の FOFC による。FOFC によれば、主要部後置構造が補部にとる構造およびそれに付加される構造ならびにその指定部の構造は、同じ主要部後置構造のみになる（Sheehan 2017: 126-127）。上述の通り、(24b) のような構造は、 α と β が同種の範疇の場合、禁じられる。仮に名詞句が左方移動をし、それが投射してしまうと、それは必然的に主要部前置型の構造になるが、そのような構造を持つ名詞句が、たとえば同じ名詞句に付加されることができなくなるとともに、その指定部に生じることもできなくなってしまう。よって、ここでは右方移動を起こし、結果としてその右方移動を経た名詞句が投射すると分析する。したがって、ここでの移動の方向性は FOFC によって説明されることになる^{23,24}。ここまでの派生を経た後の構造は以下のようになる。

- (40) a. $\{\text{山田}\}_{\text{外科医}} \{\text{山田, 外科医}\} \{\text{山田}\}$
 b. $\{\text{外科医}\}_{\text{山田}} \{\text{山田, 外科医}\} \{\text{外科医}\}$

(40a) によって「外科医の山田」、(40b) によって「* 山田の外科医」、という名詞句連結構文が、それぞれ生じる。なお、後者は「*」が示すように非文ではあるが、これは、5.1 節の小松原 (2016) による「反転修飾」構文または 5.2 節の菊地 (2008) による「評価的同格構文」に対応しうる構造である。これは、本論では後述の通り、「統語部門では派生されるが、語用論以降で排除されうる構文」に該当する。

4.3. 説明

ここまで、PNCN の派生を見てきた。次節では本節での分析によって、III 節で取り上げた先行研究が抱えていた問題に対し説明を与えることを試みる。

まず第 1 に、1 番目の名詞句を 2 番目の名詞句の主要部 N の補部とみなす分析が抱えてい

²³ この FOFC は、岸 (2021) で、筆者が英語の前位・後位形容詞の分析にも利用したが、他にも様々な経験的基盤を持つ一般性の高い原理である。詳細については Sheehan et al. (2017) を参照されたい。

²⁴ なお、論理的可能性としては、名詞句が左方移動し不変化詞「の」が投射するパターンと名詞句が右方移動し同じく不変化詞「の」が投射するパターンもあるが、いずれも構造全体が名詞句としては解釈できない。特に後者の場合はいわば不変化詞「の」による構造が指定部後置型になるが、そのような構造を仮定することが経験的に正しいとは考えられない。前者の構造は日本語の構造として認められうる形式を持っているが、そのような構造を仮定するための経験的根拠があるかどうか不明である。よって、これらのような派生のパターンはここでは考察対象外としたい。

た(10)の問題については、2番目の名詞句に形容詞句が対併合によって付加されると考えれば容易に説明できる。

第2に、併合操作によって統語構造が構築される本論の分析では、枝分かれしない節点が生じることはないので、1番目の名詞句を2番目の名詞句のN'の付加部とする分析が抱えていた問題はそもそも起きえない。

第3に、1番目の名詞句を2番目の名詞句のN'または最大投射に付加させる分析では、ともに関係節が基底構造となっていたが、そこで問題となっていた、「である」から「の」への書き換えについては、本論ではそのような操作の存在を仮定しないので問題にはなりえない。なお、その一方で、本論の分析のもとでは、叙述関係を確立させる小節が不変化詞「の」の補部として生起しており、その両者が2番目の名詞句に付加されたのと類似した構造になっている。小節のうちの片方の名詞句は2番目の名詞句のコピーであるため、結果的に関係節内のproが主要部名詞を指すときの構造と同種の構造になる。その意味で、本論で提案した構造は、「関係節を仮定したときの問題を回避しながら、関係節的な構造を持っている」とも言える²⁵。

最後にRPを仮定した分析が持つ問題については、本論ではRそのものの存在を仮定することなく、Moro (2000) や Chomsky (2013), Chomsky et al. (2019) などの提案を採用したうえで小節および叙述をとらえているので、Rの存在意義が問題になることはない。また、本論の分析の下では、不変化詞「の」は主要部後置型構造の主要部として生起するので、日本語が持つ通常の主要部後置型構造に基づいた説明が可能であり、PNCNの「の」は一律、「だ」に対応する不変化詞という同一範疇の主要部として構造に導入される。

V. 帰結

前節では、PNCNが小節を基底構造としたうえで、それが、主要部である不変化詞「の」の補部として生じ、ラベル決定の必要性のためにどちらかの名詞句がFOFCに従う形で右方移動を受ける分析を提示した。以下でこの分析がもたらす帰結を述べる。

5.1. 反転修飾構文

まず1つ目の帰結として、小松原(2016)による、(41)のような「反転修飾」による構文を容易に説明できるという点があげられる。

²⁵ この点については5.3節でも触れる。

- (41) a. 新品のペットボトル
 b. ペットボトルの新品 (小松原 2016: 185)

前述の通り、不変化詞「の」の場合は、岸 (2018) で取り上げたような複合辞「という」の場合とは異なり、名詞句と不変化詞「の」との間では一致が起きず、2つの名詞句のどちらも小節のラベル決定のための移動の候補になる。したがって、小節構造にあった名詞句「新品」と「ペットボトル」のどちらも右方移動を経て派生されうる。より具体的には、(42a)の構造から、名詞句「ペットボトル」が右方移動を起こせば(42b)が、名詞句「新品」が右方移動を起こせば(42c)が、それぞれ派生される PrtP (= Particle Phrase) は不変化詞「の」の投射を表す。

- (42) a. $[_{PrtP} [_{\alpha} [_{DP1} \text{ペットボトル}] [_{DP2} \text{新品}]] \text{の}]$
 b. $[_{DP1} [_{PrtP} [_{\alpha=DP2} t_i [_{DP2} \text{新品}]]] \text{の}] [_{DP1} \text{ペットボトル}]_i$
 c. $[_{DP2} [_{PrtP} [_{\alpha=DP1} [_{DP1} \text{ペットボトル}] t_i] \text{の}] [_{DP2} \text{新品}]_i$

なお、小川 (2016) で扱われた等位同格構文のうち、「子どもの犬／犬の子ども」(小川 2016: 285) のような事例にも同様の分析が可能であると考えられる。

5.2. 評価的同格構文

2つ目の帰結は、本論の分析が、菊地 (2008) による「評価的同格構文」に容易に応用できるという点である。評価的同格構文とは、前節の反転修飾構文の (41b) のように叙述名詞句が2番目に生起する、(43) のようなものである。

- (43) a. Xのバカ (がまたしでかした)
 b. Xの嘘つき (にはあきれる) (菊地 2008: 280 一部改変)

この構文を本論の元で分析すれば、(43a)の主語名詞句は派生のある段階で(44a)の構造を持ち、名詞句「バカ」が右方移動を引き起こすことで(44b)のように派生される。

- (44) a. $[_{PrtP} [_{\alpha} [_{DP1} X] [_{DP2} \text{バカ}]] \text{の}]$
 b. $[_{DP2} [_{PrtP} [_{\alpha=DP1} [_{DP1} X] t_i] \text{の}] [_{DP2} \text{バカ}]_i$

4.2 節の最後で述べたように、「* 山田の外科医」は非文ではあるが、その原因は、一見したところ、この構文の場合、2 番目の名詞句が否定的な意味をもつものに限られる（菊地 2008：283-284）という特徴によるものと考えられる。以下の事例を考察しよう。

- (45) a. X の {へぼ監督/* 大監督 // どけち/* 節約家}
b. * 東京の都会から早く逃れたい // {仙台/* 東京} の田舎から早く逃れたい
(菊地 2008：283-284)

菊地（2008：283-284）の説明にあるように、(45a) からは、「へぼ監督」「どけち」のような侮蔑的・否定的表現は評価的同格構文として許容されるが、「大監督」「節約家」のような肯定的表現が容認性の低下を招くことがわかる。同様に、(45b) では、述部「早く逃れたい」により否定的評価を受けるものがその補部に生起しなければならないが、「東京の都会」はそのような評価を受けるものとは解釈しにくいので、容認度が低下する。また、この述部「早く逃れたい」が持つそのような性質により、後半の表現のうち「仙台の田舎」は許容される場面が比較的考えやすいが、「東京の田舎」は非文となる。

しかしながら、たとえば、皮肉を込める文脈（や冗談を述べる文脈など）では、(45) で非文となっていたような例も容認可能になる。たとえば (46) を考察しよう。

- (46) a. あ、ほら見て。X の大先生がやってきましたよ。(笑)
b. X の天才外科医がおっしゃるんだから間違いはないよ。たぶん。(笑)

(46) に含まれる「大先生」や「天才外科医」は、(43a) の「バカ」や (45a) の「へぼ監督」「どけち」「田舎」などとは異なり、内在的に否定的な意味内容を持つわけではない。しかしながら、皮肉・冗談の文脈ではこれらの使用も可能である。

このように、評価的同格構文としての使用の可否は、必ずしも語の内在的意味に依存するわけではなく、文脈に依存しているように思われる。これが意味するのは、統語部門における派生では、否定的な意味を持つ (43) や (45) とともに (46) も派生できるようにしておき、転送された統語構造が意味部門での計算を経て語用論で処理される段階で評価的同格構文として解釈されるか否かが決まると考えるのが妥当であるということであろう。これは、併合される 2 つの最大投射のいずれも右方移動の対象になる本論の分析から予測されることそのものである。

では、そのような語用論での処理としてどのようなものが考えられるであろうか。ここで

は、Sperber and Wilson (1986, 1995²) の「関連性理論 (Relevance Theory = RT)」が説明を可能にする考え方の一つであると論じる。RT は「関連性」(relevance) という概念を用いて、人間の発話・解釈のメカニズムを説明しようとする理論であり、ここでの「関連性」とは、Sperber and Wilson (1995²: 265) の定義に基づけば、概略、「個人の認知環境を、最適な形で (= 最小限の処理労力で最大の効果をもたらすように) 改善させる性質」のことを指す²⁶。この理論における話者と聴者の間では、「最適な関連性を持つ情報伝達」が行われると考えられ、話者は自身の発話を、「最適な関連性」を持つものとして聴者が理解することを期待しながら発話を行い (Sperber and Wilson 1995²: 265-272)、聴者は、話者の発話を解析した結果、いくつかの可能な解釈の中から最適な関連性を持つものとして解釈を決定すると考えられる (Sperber and Wilson 1995²: 163-171, Wilson and Sperber 2004: 613 の「関連性理論による解釈手順」(Relevance-theoretic comprehension procedure) もあわせて参照)²⁷。

このような考え方に従うと、以下のような説明が可能になると考えられる。まず否定的な意味を持つ (43a) の例の場合、「X のバカ」という表現を発する話者は、「X のバカ」という表現を「X という個体が存在し、その個体が『バカ』という属性を持ち、現実世界においてその評価は妥当である」という前提に基づき、それを耳にする話者がその通りに解釈するという予測をもとに発話を行う。聴者がその表現を耳にしたとき、同様の解釈が聴者の認知環境を改善させるものとなるため、「関連性を持つ」解釈として選ばれる。この聴者がいる文脈で同様の前提があれば、この解釈を得るために労力も特にかからないため、これが「最適な関連性を持つ」解釈として選ばれると考えられる。

一方で、(46a) の「大先生」は否定的な意味は持たない。よって、ここでは「X という個

²⁶ Sperber and Wilson (1995²) による関連性の定義は複数あるが、たとえば以下のようなものがあげられる。

(i) *Relevance to an individual* (comparative)

Extent condition 1: An assumption is relevant to an individual to the extent that the positive cognitive effects achieved when it is optimally processed are large.

Extent condition 2: An assumption is relevant to an individual to the extent that the effort required these positive cognitive effects is small. (Sperber and Wilson 1995²: 265)

(i) の *Extent condition 1-2* に記載されているとおり、「関連性の高さ」は認知効果の大きさと達成のための労力の小ささに応じて決定される (Sperber and Wilson 1995²: 125 も参照)。また、Sperber and Wilson (1995²: 265) によれば、「認知効果」(cognitive effect) とは、「個人が持つ信念が変わること」であり、「正の認知効果」(positive cognitive effect) とは、「認知的機能や目標のプラス方向に達成させることに貢献する認知効果」を指す。

²⁷ 厳密には、Sperber and Wilson (1995²: 237-243) では、たとえば聴者が話者の発話を繰り返し発話 (echo) し、その「繰り返し発話」に対する心理的態度の表明として「皮肉」表現が生じると論じている。この考えに基づけば、たとえば話者が皮肉の意味で最初に「X の大先生」と発話する場合は、自分自身の思考に対し繰り返し発話を行い、それへの態度表明としてこの発話を行うということになると思われる (この点に関しては Wilson and Sperber 1992: 60 も参照)。本論では、この繰り返し発話の果たす役割については捨象する。

体が存在し、その個体が『大先生』という属性を持つ」という解釈が含まれることになるが、仮にここでの文脈が「Xが『大先生』と呼ばれるにふさわしくない」という文脈の場合、この表現を皮肉と取り、「『大先生』ではないXを『大先生』と呼ぶことでXの『大先生』らしくない性質をより際立たせている」と解釈するのが、「認知環境を改善させる解釈」となると考えられる。もちろん、このような解釈を生むには文字通りの解釈と比較すれば大きな労力が必要とされる。しかし、聴者が、もし仮に「Xが『大先生』ではない」という文脈に基づき、「Xの大先生」を文字通りに解釈しようとする、「認知環境の改善」につながらない。よって、文字通りの解釈ではなく皮肉の意味の解釈が「最適な関連性を持つ」解釈となると考えられる。

なお、「大先生」ではなく「先生」の場合は、「大」を欠くことで「Xの『先生』らしくない性質をより際立たせる」ことが困難なため皮肉としての解釈が得にくく、認知環境の改善に貢献しにくい。また、文字通りの意味と解釈する場合も、「『先生』という属性をXが持っている」という解釈にしかならないため、情報価値として有益なものとは考えられず、認知環境の改善に貢献しにくい²⁸。よって、労力の問題を置いておいたとしても、このような表現の場合は、適切な解釈が得られにくくなり結果として容認度が低下すると考えられる²⁹。

5.3. 概念的帰結

本論では、主に不変化詞「の」による名詞句の統語派生を扱ってきたが、そのさい、4.2節でみたように時制要素を伴う連結辞構文との共通性に焦点をあて、議論を進めてきた。そのうえで、最大投射同士のESMという形式が両構文の派生に関わると論じてきた。その意味では、Chomsky (1970) などから生成文法で仮定されている、「節と名詞句の平行性」という、良く知られた一般化に沿った議論を展開してきたことになる。これは、同時に、その「節と名詞句の平行性」に対して支持根拠を提供したことにもなると言えるだろう。

また、本論では、一般化叙述構造 (= (27)) を使って議論を展開してきた。上述の通り、叙述関係は最大投射同士のESMによって定義されるが、これはHeim and Kratzer (1998)の理論では両最大投射による構造全体が意味タイプtに対応するものになると考えられる。一方で、修飾関係は、どのような構造であるべきだろうか。ここでは、Chomsky (2013: 45)

²⁸ (43a) の「Xのバカ」を侮辱的な表現として文字通りに解釈する場合は、「Xを侮辱する」という目的を話者・聴者ともに持っていると考えられるので、この表現を文字通りに解釈することは認知環境の改善をもたらすと考えられる。

²⁹ なお、読者の中には、ここでの説明に基づく、評価的同格構文ではない「外科医の山田」も同様の理由で排除されてしまうのではないと思われる方もいるだろう。しかしながら、「外科医の山田」は、「『外科医』という属性を持った山田」という指示対象を指す、通常の名詞表現である。したがって、評価的同格構文とは異なり、文字通りの解釈以上のものが期待されることはない。よって、「外科医の山田」の容認度の低下は起きないと考えられる。

の基本的な考え方を採用し、最大投射同士の外的対併合 (External Pair-Merge) または内的対併合 (Internal Pair-Merge) によって具現されると考える。よって、本論での統語論における叙述の定義は「ESM によって形成される最大投射同士の集合」、修飾の定義は「対併合によって構築される最大投射同士の関係」となる。

さらに、本論の分析では、PNCN が小節構造を基底構造に持ち、ラベル決定の理由で、WS を拡大させない形でどちらかの名詞句が FOFC に従い右方移動し投射する分析を提示した。その意味では、4.3 節でも述べた通り、「外科医の山田」という表現の意味は、本論の構造に基づけば、「 X_1 が外科医である、という関係が成り立つような山田₁」という意味を持つが、これは [[_{CP} pro₁ 外科医である] [山田]₁] という関係節による構造と意味的に近い。その意味で、本論の分析では、PNCN が関係節的な構造を持っていると言えなくもない。それでありながら、3.2, 3.3 節で取り上げた関係節を直接的に用いたときに直面する問題は回避できる分析を、本論では提示している。不変化詞「の」による名詞句連結構文は直観的に関係節が関与しているような印象も受けるが、その意味ではその直観は必ずしも誤りではないということになるだろう。

VI. おわりに

以上、本論では、名詞句を連結した構文のうち、不変化詞「の」によるものを取り扱った。特に、その不変化詞「の」は連結辞の性質を持つという仮定と、岸 (2015, 2018) による同格構文と同様に、それらの構文の基底構造が小節構造であるとする無陳述仮説のもと、小節を ESM による構造とみなし、WS, 一般化併合, LA, FOFC を採用した枠組みでこの構文の派生の説明を試みた。また、本論の分析によって、反転修飾構文や評価的同格構文、また、本論の分析によって、反転修飾構文や評価的同格構文の派生が容易に説明され、いくつかの概念的帰結が得られると論じた。

なお、本論で扱えなかった問題の 1 つに、意味タイプの問題がある。本論では、小節は意味タイプ t を持つと仮定している。その小節は不変化詞「の」の補部となるが、名詞句全体として機能する段階では何らかの形で名詞句の意味タイプ (固有名詞の e (ntity) タイプ、または通常の名詞の $\langle e, t \rangle$ タイプ (= e タイプの要素を項としてとり、 t の値を返す関数)) に変換されるはずである。評価的同格構文の分析において、上述の通り、菊地 (2008: 286) は、RP を仮定しつつも名詞変換要素として n の存在を仮定しており、おそらくこの n にはタイプを変換する機能も持たせているものと思われる。本論の分析のもとでは、このような役割はもしかすると不変化詞「の」が果たすと言えるのかもしれないし、名詞化を果たす何

らかの機能範疇の存在があるのかもしれない。この問題については今後の研究課題としたい。

また、本論で扱って来た連結辞的な機能を果たす不変化詞「の」は、以下の事例からわかるように、古くから存在していたようである。

- (47) a. 知ろしめさじかし、このごろ藤大納言と申すなる御兄の右衛門督にて隠れたまひにしは。

(『源氏物語』 橋姫 引用は阿部ほか 1997 : 146 より 下線は筆者)

- b. いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞきたまへるが、…。

(『更級日記』 引用は藤岡ほか 1994 : 320 より 下線は筆者)

(47a)における下線の「の」は、「藤大納言と申すなる御兄」と「右衛門督にて隠れたまひにし」の間に、また、(47b)の「の」は「いみじうけだかう清げにおはする女」と「うるはしくさうぞきたまへる」の間に、それぞれ生起している。これらは、佐伯 (2019 : 85) や林・安藤 (2017 : 778) で指摘されるように、「で」の意味をもつ「の」の用法、つまり、連結辞「だ」の意味に近い用法と考えられる³⁰。

なお、佐伯 (2019 : 84-85) でも指摘されているように、(47a)の述語「隠れたまひにし」と(47b)の述語「さうぞきたまへる」の後に、音形を持たない既出の名詞表現が再び生起していると考えられることもできる。特に、佐伯 (2019 : 84-85) は、はっきりと、この用法の「の」を含む表現と、次のように「の」を連続させる用法との関連性について言及している。

- (48) a. ビールの 冷やしたのが ありますか。
b. 帽子の 新しいのを 拾った。(佐伯 2019 : 85 傍点を削除し下線を追加)

これは述語「冷やした」と「新しい」の後の位置に代用表現の「の」を補った用法だが、1

³⁰ 実際、(47b)の現代語訳として、藤岡ほか (1994) と林・安藤 (2017) は以下のようなものを与えている。

- (i) a. 非常に気高く清楚な感じで、端正に装束をととのえておいでの女性が、…。
(藤岡ほか 1994 : 320 下線は筆者)
b. [大変] 気高く美しいようすでいらっしゃる女 (の方) で、端正に装束をなさっている (女の方) が、…。 (林・安藤 2017 : 778 下線と [] 内は筆者)

なお、(47a)の現代語訳としては、阿部ほか (1997) が、「ご存じではありますまい、このごろ藤大納言とか申し上げるお方の御兄君の、右衛門督でお亡くなりになったお方のことは」(阿部ほか 1997 : 145 下線は筆者)を与えているが、ここでの下線の「の」も「で」に言い換えられるものであると思われる。

番目の「の」はちょうど連結辞「で」で言い換えられる。

- (49) a. ビールで 冷やしたのがありますか。
 b. 帽子で 新しいのを 拾った。

このような事例に対し、どのように本論の分析を適用させるべきかについても今後の研究課題としたい。

参考文献

- 阿部秋生・秋山慶・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）（1997）『新編日本古典文学集 24 源氏物語 5』小学館。
- Abney, Steven. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Biberauer, Theresa, Anders Holmberg, Ian Roberts and Michelle Sheehan. (2017) Empirical Evidence for the Final-over-Final Condition. In Michelle Sheehan, Theresa Biberauer, Ian Roberts, and Anders Holmberg. *The Final-Over-Final Condition*, pp. 12-25. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Basilico, David. (2003) The Topic of Small Clauses. *Linguistic Inquiry* 34 : pp. 1-35.
- Bošković, Željko. (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bowers, John. (1993) The Syntax of Predication. *Linguistic Inquiry* 24 : pp. 591-656.
- Chomsky, Noam. (1970) Remarks on Nominalization. In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum. (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, pp. 184-221. Waltham, Mass.: Ginn and Company.
- Chomsky, Noam. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka. (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, pp. 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2001) Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, pp. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2008) On Phases. In Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta. (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, pp. 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2013) Problems of Projection. *Lingua* 130 : pp. 33-49.
- Chomsky, Noam. (2015) Problems of Projection: Extensions. In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini. (eds.) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, pp. 3-16. Amsterdam: John Benjamins.
- Chomsky, Noam. (2019) Some Puzzling Foundational Issues: The Reading Program. *Catalan Journal of Linguistics Special Issue* : pp. 263-285. <<http://hdl.handle.net/10150/657351>> (2022年8月16日閲覧)
- Chomsky, Noam, Ángel J. Gallego and Dennis Ott. (2019) Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges. *Catalan Journal of Linguistics Special Issue* : pp. 229-261. <<http://hdl.handle.net/10150/657350>> (2022年8月16日閲覧)
- Collins, Chris, and Edward Stabler. (2016) A Formalization of Minimalist Syntax. *Syntax*

- 19: pp. 43-78.
- Declerck, Renaat. (1983) 'It is Mr. Y' or 'He is Mr. Y'? *Lingua* 59: pp. 209-246.
- Den Dikken, Marcel. (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫(校注・訳)(1994)『新編日本古典文学集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館。
- 原口庄輔・中村捷・金子義明(2016)『増補版 チョムスキー理論辞典』研究社。
- 林巨樹・安藤千鶴子(編)(2017)『新全訳古語辞典』大修館書店。
- Heim, Irene and Angelika Kratzer. (1998) *Semantics in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell.
- Higgins, Francis R. (1973) *The Pseudo-cleft Connectedness in English*. Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]
- Holmberg, Anders. (2017) Introduction. In Michelle Sheehan, Theresa Biberauer, Ian Roberts, and Anders Holmberg. *The Final-Over-Final Condition*, pp. 1-9. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 菊地朗(2008)「評価的同格構文について」金子義明・菊地朗・高橋大厚・小川芳樹・島越郎(編)『言語研究の現在—形式と意味のインターフェース—』pp. 280-290. 開拓社。
- 岸浩介(2015)「英語の緊密同格表現に関する一考察」*JELS* 32(日本語英語学会第32回大会(学習院大学)・第7回国際春季フォーラム(同志社大学今出川キャンパス)研究発表論文集) pp. 35-41. 日本英語学会。
- 岸浩介(2018)「同格表現に対する極小主義的アプローチ」『英語英文学論集』46: pp. 99-126. 都留文科大学英文学会。
- 岸浩介(2021)「英語における形容詞の統語的位置と意味解釈に関する考察」金澤俊吾・柳朋宏・大谷直輝(編)『語法と理論の接続をめざして—英語の通時的・共時的広がりから考える17の論考—』pp. 231-251. ひつじ書房。
- Kitada, Shin-Ichi. (2012) A Theory of Linearization and Its Implication for Boundedness of Movement, *English Linguistics* 29: pp. 223-258.
- 小松原哲太(2016)『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学』京都大学出版会。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版。
- 三尾砂(1942 [1995])『話言葉の文法(言葉遺篇)』帝国教育会出版部。[1995年くろしお出版より復刻]
- Moro, Andrea. (2000) *Dynamic Antisymmetry*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Nakajima, Heizo. (1991) Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP. In Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike. (eds.) *Topics in Small Clauses: Proceedings of Tokyo Small Clause Festival*, pp. 39-57. Kuroshio.
- 日本語記述文法学会(編)(2009)『現代日本語文法 2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版。
- 西山佑司(1990)「『カキ料理は広島が本場だ』構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22: pp. 169-188.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房。
- 小川芳樹(2016)「日英語の等位同格構文と同格複合語の統語構造と構文化についての共時的・通時的考察」小川芳樹・菊地朗・長野明子(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』pp. 284-306. 開拓社。
- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版。
- Radford, Andrew. (1981) *Transformational Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐伯梅友(2019)『古文読解のための文法』ちくま学芸文庫。
- Sheehan, Michelle. (2017) The Final-over-Final Condition and the Head-Final Filter. In Michelle Sheehan, Theresa Biberauer, Ian Roberts and Anders Holmberg. *The Final-Over-Final Condition*, pp. 121-149. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Sheehan, Michelle, Theresa Biberauer, Ian Roberts and Anders Holmberg. (2017) *The Final-Over-*

- Final Condition*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店.
- 島津明・内藤昭三・野村浩郷 (1986) 「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」『計量国語学』15 : pp. 247-266.
- Sperber, Dan and Dierdre Wilson. (1986) *Relevance : Communication and Cognition*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Sperber, Dan and Dierdre Wilson. (1995²) *Relevance : Communication and Cognition*, 2nd Edition. Oxford : Blackwell.
- Stowell, Timothy. (1978) What Was There before *There* Was There. *CLS* 14 : pp. 458-471.
- 杉山栄一 (1964) 「助詞の細分」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝 (編) 『口語文法講座 2 各論研究編』 pp. 259-284. 明治書院.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber. (1992) On Verbal Irony. *Lingua* 87 : pp. 53-76.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber. (2004) Relevance Theory. In Laurence R. Horn and Gregory Ward. *The Handbook of Pragmatics*, 607-632. Oxford : Blackwell.
- 于飛 (2014) 「日本語助詞「の」の研究」『言語と文化論集』20 : pp. 135-182. 神奈川大学大学院 外国語学研究科. <http://www.gsfl.kanagawa-u.ac.jp/ronsyu/img/vol_20/vol20_05.pdf> (2022 年 8 月 16 日閲覧)

(きし こうすけ 東北学院大学教養学部 准教授)